
他人のお話

飯野こゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

他人のお話

【Nコード】

N2347E

【作者名】

飯野こゆみ

【あらすじ】

私はごくごく平凡な女の子だったと思う。でもどいう訳なのか他人の恋のターニングポイントに鉢合わせする事が多いような気がする。それはただ単に都合の良い友達？というか、当たり障りのない子だったかもしれない。私が出会った恋のお話を綴ってみたいと思います。

妄想の強い女の子

私はごくごく平凡な女の子だったと思う。でもどういう訳なのだから他人の恋のターニングポイントに鉢合わせする事が多いような気がする。それはただ単に都合の良い友達？というか、当たり前障りのない子だったかもしれない。私が出会った恋のお話を綴ってみたいと思います。

初めに思い出すのは中学の時のミカだ。

私達の中学校は2つの小学校から入学する。

ミカは隣の小学校の卒業生だ。

でも中学1年の夏休み、我が家の前の田んぼを埋め立てて出来た建売住宅に引越してきた。

ミカは真面目な学校の中に何人かいる不良に憧れる子だった。私を格下だと思っていたのだろう、いつも

「あたしつてさあ」と始まり

タバコ止められないんだよねとか、あの先公が気に食わないなどと言ってきた。

私はいつも

「そうなんだあ」

と聞き役専門で、ミカは、

あんたにはこんな事話しても解らないよねえ。

これが口癖だった。

そのミカに好きな人がいた。

ミカと同じ小学校だったかつくんと呼ばれるその男の子は背も高く、少年野球をしていたそうで、人当たりのよさそうな柔らかい感じのする男の子だった。

そんな彼を好きな子がもう一人、レイちゃんだ。

2人はいつも当の彼を差し置いてライバル心むき出しで、凄いバトルを繰り広げていた。

土曜のお弁当どっち食べてもらうか競争、一緒に帰るのどっちか競争、e t c . 周りは冷めた目でみていたと思う。

そんなある日の事だった。ミカが仕掛けた。

「あつちゃん、今日の放課後少し付き合ってくれない？」

そうは言うが強制的に放課後連れてこられたのは、彼が中学で入った卓球部が練習している体育館。

「ちょっとここで待ってて」

の言葉を残し彼女は体育館の入り口へ、そして彼を呼びよせた。ミカは言った。

「私、こんな状態もう嫌なの、私はかつくんが好き。かつくんは私の事どう思ってるの？」

と。でも彼は一言も発しなかった。

というか、固まっていた。

ミカはまた

「お願い、好きか嫌いかはつきり言って！」

その問いに彼はしばし無言だったが、暫く続いた沈黙の後

「きらい。」

それはそれは蚊の鳴くようなとても小さな声だった。

ミカは

「なんて言ったの？もう一度大きな声で言って」と

私は吃驚した、勇気があると。

すると今度は彼が意を決したように

「きらいだ」

無言も沈黙もなく今度ははっきりと聞こえた。

そして、じゃあといって体育館に戻ってしまった。

ミカはというと、目に涙を浮かべながら一際大きな声でこう叫んだのである。

「本当の事言ってよ！！」

と。

だから言ってるじゃん」と強く思ったが、ミカの脳内ではいろいろと変換されているらしく1つの答えが導きだされた。

私を見ながら、

「あっちゃんがいいたからだよ、きつとかっくん恥ずかしくって本当の事言えなかったんだよ。」

どれだけポジティブなんだよ。

そんな風に考えられえる彼女が少しだけ羨ましくもあるようなないような。

人を想うことは良いことだと、それは解ります。

でも相手の気持ちを無碍にしてはいけないと思う。

この場合は思いを告げた彼女を振ってしまった彼のことではなく、告白され、先輩も沢山いる体育館の隅で頑張つて断つたにも関わらず、その言葉が無かつた事にしてしまう彼女。

きつとミカにはこの彼から断られるシナリオは無かつたのでしょう。

彼には彼女ができた。

それはミカでもレイちゃんでもなかった。

小学校の頃から好きだった子だと。

その後の中学生活で彼と彼女が話しをしている姿を見たことは一度もなかった。

モデル女の子

次は私がバイト先で出会った女の子である。

私は高校3年生の時、学校近くのガソリンスタンドでバイトを始めた。

そこへ中学の時の1つ上の先輩が入ってきた。

中学の時とは全く違う雰囲気になっていた彼女。

私は直ぐに気がついたが向こうは全く気がつかなかったようだ。

その彼女が話す”彼”の話がとても面白くて私は先輩に自分が同じ地元だと言う事は言わないで置く事にした。

そう、彼女もやっぱりとんでもない妄想壁の持ち主だったからだ。

私の通う学校は地元の駅から3つほど離れた場所にあった。

私は学校帰りによつていたのだが、その先輩、ゆき先輩はなんのゆかりもないこのスタンドに取ったばかりだという車の免許をひらひらさせながら軽自動車に乗って通っていた。

真っ黒で太いアイラインに紫色のアイシャドー、着てくる洋服もいかにも……

これ以上はゆき先輩の為に私の口からは言わないでおきます。

「昨日彼がさあ〜」

そんな風にいつも彼の話をするゆき先輩。

夜中ドライブしていたら、どうしても私の作ったオムライスが食べたくなって言っさあ〜。

私ともういいっていつてるのにしつこくて、今日は寝不足だよ。

たまに、Hな話も交えながらいかに自分が彼に愛されているかを語っていた。

バイト仲間は

「ヘー」だの「ふーん」だのそれで、それと言って彼女を煽る。みんな面白がっているようだったけど本人だけは真面目に彼の事を語っている。

そのうちに

「彼がどうしても私と離れたくないって言って」

といいあげくの果てには

「うちの庭にプレハブがあって、とうとうそこに引越してきたよ。まいっちゃうね」でも今までだって殆ど私の部屋に居たんだから同じなんだけど。」

と言い切った。

でも私知ってるんだ。

ゆき先輩の妹は私の中学の部活の後輩で、同じ高校だったの。

朝の電車で一緒になった時、

「お姉ちゃんと彼、仲良さそうだね」
って聞いてみたら

「えっー先輩（私の事ね）何言ってるですか！うちの姉貴に彼なんているはずないじゃないですかぁー」
って大笑い。

そこで更に

「だって庭のプレハブに引越してきたんじゃないの？」
って聞いてみた。返ってきた返事は

「うちの庭にプレハブなんてないですから。それにバイト以外毎日家でゴロゴロしてるんですから彼なんているはずないって！どこからそんな話がでたんです？」
って笑いが止まらない妹さん。

ここまできたら可哀相になってしまつて、
「ちよつと噂をね」
と。

”お姉ちゃんがでどころだよ”とはとても言えなかった。

そしてまた、彼女のお惚気話を聞く毎日。
多分、大げさに言ってるだろうなあ。

なんて思っていたけど、彼そのものが居なかったとは思わなかった。

暫く経ったある日、他のバイトから、ゆき先輩は私と同じ中学だということを知りたいらしい。

そのせいなのかどうだか解らなかったけど、それから何日もしないでひっそりバイトを辞めてしまった。

私もみんなもちよつとの間寂しくなったことは彼女は知らない。
今どうしているのかな？とふと思ったりして。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2347e/>

他人のお話

2010年12月19日14時11分発行